

## ドイツのマルクト広場の類型

芦川智、金子友美  
鶴田佳子、高橋真紀

### The Study of the Form about Marktplatz in Germany

Satoru ASHIKAWA and Tomomi KANEKO and Yoshiko TSURUTA  
and Maki TAKAHASHI

This report is the explanation about form of Marktplatz in Germany. There are many Marktplatz in many cities in Germany. Markt means market-place, but it means not only market-place in Germany but also the center of city. We have investigated many Marktplatz in German cities in 1998. The purpose of this report is the classification of Marktplatz.

#### (1) はじめに

広場の種類をどのように規定していくかは広場を研究対象とするものにとって大きな課題である。S.D.S.(Space Design Series) (新日本法規出版)によれば、歴史的な広場の種類として次のような種類をあげている。政治的な広場(古代広場、市民自治の広場、君主・王の広場)、マーケット広場、宗教的な広場、見世物の広場、交通の結節点の広場、街路空間である。広場とは単純に一つ概念でくくることは難しい。というのは、複合された機能を担っている対象が多く、特に都市のセンター機能を担っている広場の場合は、上に挙げた広場の種類の内、幾つ

かにかかる概念に対応するものが多いことにもよる。さて、本報告の主題であるマルクトプラッツであるが、この名称はドイツを中心として、オランダ、ベルギー、ルクセンブルクにかけてこの名称で呼ばれる広場が多く存在していることが知られている。前記の広場の種類に該当させると、マーケット広場にあたるものである。ドイツ語のマルクトとは、市場を意味している。

さて、私たちの海外都市広場調査の第9回は、ドイツとフランスで実施したが、ドイツ国内では多くのマルクトプラッツに遭遇し、調査対象としてきた。今回の報告は、このドイツにおけるマルクトプラッツの類型に焦点を当てて整理

をしていくこととしている。

## (2) マルクトの名称と概念

前述の通りドイツにおける都市の広場には、マルクトと称する広場が多く存在し、その種類は多様にある。調査を行ったドイツの広場において、単にマルクトと呼ばれる場合と、マルクトプラッツと呼ばれる場合をスタートとして、マルクトという単語を含む広場名称は極めて多様である。以下にマルクトを含む広場名称について挙げてみる。なお、日本語訳がわかる広場については、カッコ内にその意味を記している。アムマルクト (AM MARKT)、ナッシュマルクト (NASCH MARKT)、プリンチパルマルクト (PRINZIPAL MARKT)、ヒューネルマルクト (HÜHNERMARKT (鳥市場))、プフェルデマルクト (PFERDEMARKT (馬市場))、シュタットマルクト (STADTMARKT)、ハウプトマルクト (HAUPTMARKT (中央市場))、フィッシュマルクト (FISCHMARKT (魚市場))、ワイニゲマルクト (WEINIGEMARKT)、グリュエナーマルクト (GRÜNER MARKT)、 Obstマルクト (OBSTMARKT (果物市場))、クラウテルマルクト (KRAUTERMARKT)、コーレンマルクト (KOHLENMARKT (炭市場))、ワインマルクト (WEINMARKT (ワイン市場))、グローサーマルクト (GROßER MARKT)、コルンマルクト (KORNMARKT (穀物市場))、オベルマルクト (OBERMARKT)、ホルツマルクト (HOLZMARKT (材木市場)) 等である。

以上のように、前置詞や名詞、形容詞と結びついて〇〇MARKT=〇〇市場と訳されているが、MARKTの意味を(コンサイス独和)辞典で引くと次の5つになる。

- ①市(いち)、市場、大市、定期市
- ②市場(しじょう)、販路、はげ口、需要地

- ③取引場所、商業地、貨物集散地
- ④取引、市況、商況、市価、相場
- ⑤(市の立つ)広場

これらから、本報告においてはマルクトプラッツを市場広場と捉えていくこととする。さて、以上のようにマルクトの意味としては、市場やマーケットの意味が示されるのであるが、単に市場広場としての意味だけではないというのが、ドイツのマルクトの特性ではないかと思われる。というのは、都市形成期においてはそれぞれのマルクトが具体的な市場の内容を含んだ広場として建設され、機能していたと思われるが、現在のマルクトは、名称のみが残って機能が失われているものがあると同時に、市場の内容自体が縮小され、他の機能が大きく拡張されていった状況のものが多く観察された。また、もともと市場の機能だけではなく他の複合された機能の下に形成された広場として建設され、それが現代的な広場として脱皮し現在の姿をなしているものなどが存在していた。

もともと、ドイツのマルクトプラッツは市場機能と共に都市のセンター機能を担って建設されたものが多く存在し、そのような都市を多く調査してきた。それゆえ「マルクトプラッツ」とは、市場機能を含みながら、都市のセンター機能をも同時に担った広場として位置づけていくことが重要であると考えられよう。この点はイタリアの多くの広場との違いではなかろうか。つまりイタリアの場合は、市場広場という機能を有する広場は多く観察できているが、それが都市のセンター機能を担っているものは多くなく、別の概念の広場がセンターをなしている場合が多い。例えば、教会を中心とした宗教的な広場や、市庁舎前の行政的な広場がセンターとなっている場合等である。つまり、イタリアの場合には、それぞれの機能を持った広場が都市の中に配置され、機能分化した形で意味づ

けがなされ、その中で市場広場自体は、センターとなるものは少ないのである。

では、ドイツのマルクトプラッツの場合はどのように考えればよいかである。マルクトプラッツとしては、市場機能自体は全体の機能の一部であり、市庁舎を配置して行政機能を持たせ、さらには教会も連携配置されて宗教広場的機能をも付加されている場合が典型的な事例ではなかろうか。つまり、都市のセンターとしての広場機能を持ちながら、その広場名称をマルクトという名称で代表していくという概念規定が妥当なところではないだろうか。

### (3) ドイツにおけるマルクト広場の分布

市場広場と呼べるものは、ポーランドやフランス、イタリアにも存在する。さらに、イスラム諸国のバザール広場にも同様に考えられる広場が存在する。しかし、ドイツのマルクト広場については前述のごとく他と少し異なった形態を示す。そこで、ドイツのマルクト広場の特性を探るため、その分布を調べた。図1は、名称にマルクトを含む広場を有する都市を示したものである。都市の検索は、資料の中で最も正確であると思われる地図を載せている「ドイツミシュラン・グリーンガイド」と「MICHELIN DEUTSCHLAND 1998」の2冊に限定して行っている。

その結果、名称にマルクトを含む広場のある都市は172都市、そのうち調査を行った都市は41都市、未調査の都市は131都市となっている。分布図によると、名称にマルクトを含む広場がドイツ各地に存在していることが分かる。そして、より南西側の密度が高く、北側の密度は低い。都市そのものの分布で南北を比較すると、南側の方が若干密度が濃い、図1ほどの差は見いだせない。

では、このような南北差は何に起因するので

あろうか。図2は旧東ドイツと西ドイツを比べたもの、図3はエルベ川とライン川を描き加えたものである。ドイツの都市建設では、ライン川やエルベ川流域の西方が先に発展し、続いて東方殖民が起こり、エルベ川以東のドイツ、ポーランドそしてチェコに都市が成立していく。地理的には、エルベ川とライン川に挟まれたエリアに、より多く分布している傾向が見られるが、都市の成立年代と広場名称にマルクトを含むかどうかの関連性までははっきりしない。

さらに、図4は北ドイツ平原をマークしたものである。北ドイツを中心とした北海、そしてバルト海沿岸といえ、ハンザ同盟都市が存在した地域である。特に、北ドイツのドルトムント・ブラウンシュヴァイク・リューネブルクを結ぶ一帯と、リューベック・ヴィスマー・ロストック・シュトラールズントを結ぶ線上にハンザ都市が集中していた。しかし、ハンザ同盟の本部が置かれたブラウンシュヴァイク・ドルトムント・ケルン・リューベックには、名称にマルクトを含む広場が存在する。残念なことに、すべてのハンザ同盟都市の地図がそろっていないわけではないため、その関連性については不明である。

### (4) マルクト広場の起源とその形態

#### 1) 起源

都市プランの研究（矢守一彦著）では、マルクト広場の源流をWIK（以降ヴィク）に求めている。ヴィクとは遠隔地商人の定住地のことである。もともと、遠隔地商人というのは、定住地を持たない遍歴商人であったが、富を得るにしたがって、定住地を求めようになったのである。その遍歴商人達が定住したヴィクの一般的な形態は河岸や交易路に沿って片側だけに建物の並ぶもので、無防備な場合が多かったという。そこで、防衛のために封建領主の居城、

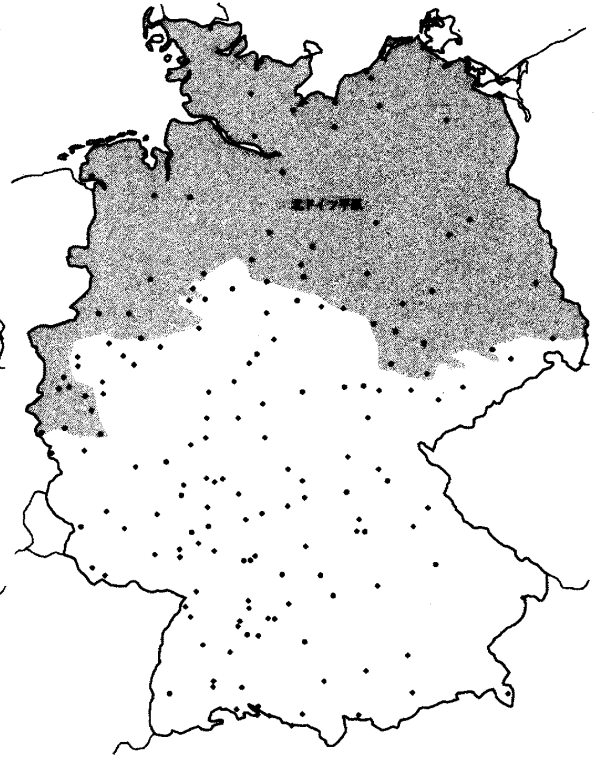
図2. 旧東西ドイツ



図3. エルベ川とライン川



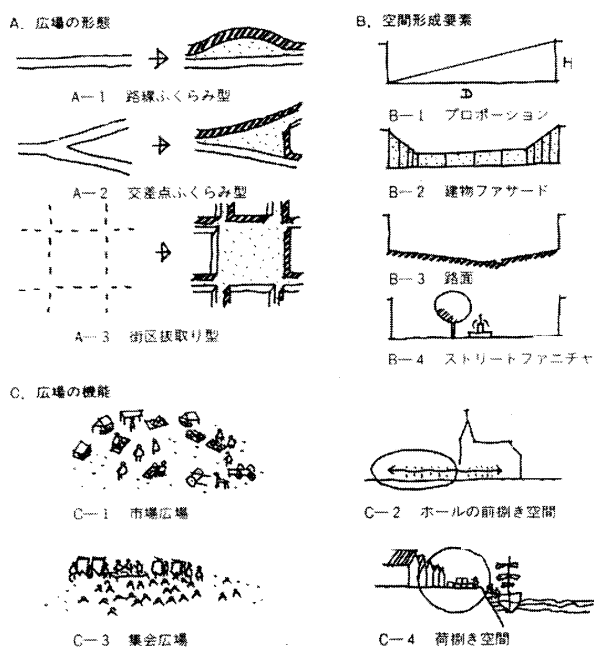
図4. 北ドイツ平原



防衛施設を伴う教会に寄生するような形で立地するように変化していった。それが起源となって市場広場すなわちマルクトへと発展していった。さて、ヴィクに伴って発生した初期の市場広場には、まず街路が割り当てられた。12世紀以降になると市場のために特別な位置と空間とを用意しようという動きが起こり、街路の一部もしくは全部の拡張が行われる。さらに13

世紀に入ると、整形のマルクト広場を計画するようになる。新しく建設された都市だけでなく、古い都市でもマルクト広場の新規建設や改修建設を行い徐々にマルクト広場が都市の中心に建設されるようになっていったのである。

図5 広場の形態、空間形成要素、広場の機能  
(出典：ドイツ中世の都市造形、彰国社)

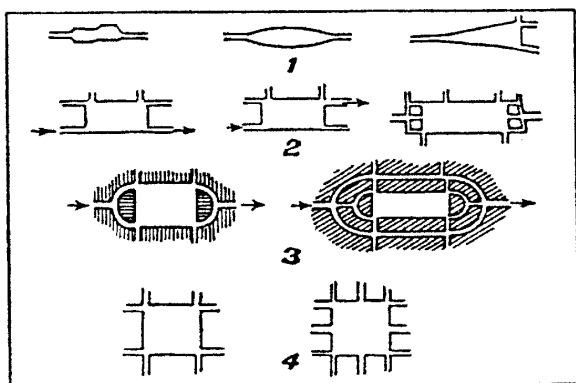


## 2) 形態

マルクト広場の形態について論じている文献は幾つかあるが、その中で図6に示す文献は、ドイツ都市プランをもとに広場の形態まで整理しているものとして参照できる内容となっている。図6では、都市の街路網の発展パターンを示したもので、第1段階から第4段階まで段階設定をしている。第1段階は、通常の街路部分に商業者達が集まっていき、いわゆるシュトラーセンマルクトの形態が生まれていったが、それが第2段階で膨らみをもちだし、幾つかの街路を組み込んで広場を確保していくタイプへ発展する。第3段階は計画的に街路を組み合わせで広場へと展開し、最終段階は、最初から広い空間を確保して、それに街路を結びつけていく形となっていた発展形態を示している。図5で示されることは、道路の形態と広場の関係を整理したものであり、道路が膨らんだ形と道路の交差部分に膨らみを作って広場を確保していくタイプ、街路を抜き取って広い空間を確保していく3つの形態を示している。

図6 街路パターンとマルクト

(出典：都市プランの研究、大明堂)



本報告の基盤となる調査事例の母集団を図7に調査事例リストとして記載している。これは、第10回の海外都市広場調査の調査事例から、ドイツ部分を抜き出したものとなっており、マルクトの名称、広場の形態、広場に面する施設の状況などをリストアップしている。図8にその代表写真を挙げている。

上記の2つの文献からの引用図をもとに広場の形態として、街路型・街路ふくらみ型・交差部ふくらみ型・面型の4種類に分類し、その形

GER-98-02 LEIPZIG



GER-98-17 MÜSNTER



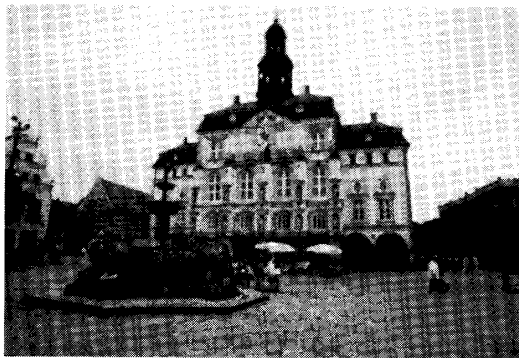
GER-98-04 HALLE



GER-98-19 LEMGO



GER-98-12 LÜNEBURG



GER-98-25 HAMELN



GER-98-14 BREMEN



GER-98-27 CELLE



態を整理していく基盤として設定した。また、広場に併置されている施設の存在は、広場の機能・あり方等に重要な要素として働くものであることにより、その施設が広場に対してどのような位置づけで存在しているかの判断を加え、形態を整理する方法の一つとして設定した。つまり、その広場に正面を向けている施設が、広場空間の中心となっているのか、広場空間の中心からははずれているのか、それとも広場空間に内包されているのかという3つの配置パターンを設定して、広場の形態と組み合わせることによって類型を導入することと考えたのである。なお、ここで広場に正面を向けている建築を対象としているのは、分類の予備段階において、広場に面してはいるけれども広場に正面を向けている建物と、側面もしくは後面を向けている建物とでは、その建物の広場に対する意味合いや性質が違ってくると思われたからである。そして、このような予備段階を経て、本報告で対象とする建物の正面を、主要な出入口のある面と定義するに至った。それにより、例えば教会の正面は基本的に正面入り口であるが、例外が4都市考えられた。それは、CODE-38のERFURT、CODE-53のMAINZ、CODE-64のTRIER、そしてCODE-01のMEIßENである。ERFURTとMAINZとTRIERは主要な出入口のある側面入り口を、同様にMEIßENは後陣部分の出入口を正面として扱っていくことにした。つまり、正面という概念をその施設へはいる主要な入り口の位置づけられている箇所として考えることとした。

広場の周辺建築の種類としては、1.新・旧市庁舎、2.教会、3.その他（美術館・博物館・郵便局・警察・裁判所・ギルドハウス等）、4.なしの4種類を設定している。そして、これらが平面配置図上で中心部分に位置する、空間の焦点になっている等を基準にし、広場空間の中心

かどうかという判断を行っている。

### 3) 模式図の概略

さて、広場の形態と施設と広場の関係をもとに類型を整理したものが図9である。この中で、広場と施設の関係に一つ枠組みを付加して作成しているが、これは実例を対応させていったときに単純に位置づけられないものが存在し、各タイプの複合として扱っていった方が望ましいと判断して設定している。図10-1～図10-6は、上記に述べた広場の形態と周辺建築の配置との組み合わせに、各広場を分類したものである。

街路型で、その空間の中心に該当する周辺建築は見あたらなかった。また、広場空間に内包されている建物は面型のみが存在し、街路型・街路ふくらみ型・交差部ふくらみ型には存在しなかった。周辺建築の配置で、各項目に該当する建物が組合せが生じる場合、または複数存在する場合があったので、模式図に複合型という項目を設けた。

複合型において、たとえば図10-2の一番下の段、広場空間の中心からはずれた位置にその他に属する建物が2つ以上存在した場合、この模式図にはCODE-17の市庁舎+教会の組み合わせとCODE-45の教会+教会+教会+その他の場合があてはまる。

さて、名称にマルクトを含んでいる広場は、街路ふくらみ型では周辺建築が広場空間の中心・広場空間の中心からはずれている、そして複合型に該当している。また、交差部ふくらみ型でも、同じく周辺建築が広場空間の中心・広場空間の中心からはずれている、そして複合型の場合に該当していた。面型では周辺建築が広場空間の中心・広場空間の中心からはずれている・広場空間に内包されている、広場空間の中心からはずれている+広場空間に内包されている以外の複合型に該当していた。

## (5) マルクト広場の諸形態と事例

マルクト広場が街路の利用から発展した経緯を考えると、街路型・街路ふくらみ型・交差部ふくらみ型・面型の全ての形態に、マルクトの名称を含む広場が存在してもおかしくない。しかし、街路型で名称にマルクトを含む広場は今回の調査事例からは見いだすことが出来なかった。というのも、単に街路に商業施設の張り付いているものは広場の調査対象から外していった経緯があるからである。そして、街路型に該当している広場自体は3事例しかない。しかし、街路型の商店街は、どの都市でも見受けられることであるので、ことさら取り上げないでも良いとの判断をしてしまったことに問題が存在していると考えられる。

以下に各マルクトの広場タイプに対応する典型を紹介していく。

### 1) 街路型について

街路型については、前述のごとく事例が少なく、街路型マルクトの事例は今回の調査事例からは見いだせなかった。街路型典型とされる事例は、リューベックの例であろう。リューベックについては、この街路型と別に面型のマルクトを保有しているが、市庁舎はむしろ街路に面していることから、街路型の典型として挙げるのがよいと考える。ただし、この事例もマルクトの名称としてではなく、街路型の典型として挙げておく。

LÜBECK：図1 1 参照

### 2) 街路ふくらみ型について

街路ふくらみ型の基準は、街路の一部がふくらんでいる、もしくは周辺の道路と比べて道幅が広い点においている。そこで、模式図のようなふくらみ方だけでなく、CODE-11のように通常の3・4倍の幅員があるものをこの項目に分類している。この典型としてメルンを挙げる。メルンはこのふくらみに面して市庁舎と商業施

設が並ぶ。

MÖLLN：図1 2 参照

### 3) 交差部ふくらみ型について

この項目では文字通り交差部がふくらんだものを対象としているが、そのふくらみ方には、模式図のように二股に分かれていく道が広場となったものや、T字型や十字型に交わった交点部分がふくらんだもの等がある。この典型事例としてはアーヘンのマルクトを取り上げる。アーヘンのマルクトは二股に分かれる道の交点に位置し、市庁舎が面している。

AACHEN：図1 3 参照

### 4) 面型について

分類した88広場のうち、61広場が面型に属し、街路型(3)、街路ふくらみ型(7)、交差部ふくらみ型(17)に比べ、最も多い型であった。面型で空間の中心に市庁舎が存在するもの(5)、教会が存在するもの(7)、その他の周辺建築が存在するもの(2)のうち、名称にマルクトが含まれている広場がそれぞれに存在した。

また、広場の中心からはずれた部分に市庁舎(3)、教会(4)、その他の周辺建築(2)が存在し、これらのうちで名称にマルクトを含むものは市庁舎(3)、教会(1)、その他(1)であった。

広場空間に建物が内包されているものでは、市庁舎(2)、教会(4)が該当し、マルクト(が名称に含まれている)広場は市庁舎(2)のみであった。

面型マルクトの典型としてマインツを取り上げる。これは大聖堂が広場に正面を向けている事例であり、商業施設が広場を取り囲んでいる。

MAINZ：図1 4 参照

## (6) おわりに

ドイツのマルクト広場は172都市に存在し



ていることが調査後にわかったが、調査実行時に多くの都市を訪れたため、当然マルクトも数多く事例を追うことが出来たものと自負していた。しかし実際には172都市のうち41都市を調査したにすぎなかった。それだけマルクト広場は数多く、しかも1都市内に複数のマルクトが存在するという実態も観察してきている。172都市という数も最も信頼できるガイドブックに限った抽出であるため、実態はさらに増えることであろう。また、都市のセンター機能を満たすためのマルクト広場が、建設当初からの機能に変化をしてきているものが多く観察されたことも、特徴として挙げられるであろう。今後、さらに実態把握を行いながら、マルクト広場についての生態を整理していきたい。また、ドイツだけでなく、マルクトの名称が見られるベネルクス3国やドイツのマルクトとその形態が類似しているポーランドやチェコの事例についても並行して整理していきたいと考えている。

#### 参考文献

- 1.中欧地域都市広場形態についての考察-1998年第10回海外都市広場調査報告, 芦川智他, 昭和女子大学学苑第715号, 1999
- 2.S.D.S. スペース・デザイン・シリーズ 第7巻 広場,S.D.S.編集委員会,新日本法規出版株式会社,1994
- 3.ドイツ ミシュラン・グリーンガイド, 実業之日本社,1996
- 4.旅名人ブックス3 ハンザの興亡, 旅名人編集部, 日経BP社, 1997
- 5.都市プランの研究, 矢守一彦, 大明堂, 1993
- 6.ドイツ中世の都市造形, 永松栄, 彰国社, 1996
- 7.エアリアガイド123 ドイツ, 昭文社, 1992
- 8.世界遺産を旅する5 ドイツ・オランダ・ルクセンブルク・北欧,近畿日本ツーリスト,1998
- 9.鉄道で行く ドイツの町, 植村正春編, グラフィック社, 1997
- 10.ドイツ 小さいまち紀行, 土田陽介編,グラフィック社, 1996
- 11.地球の歩き方25 ドイツ,地球の歩き方編集室,ダイヤモンド・ビッグ社,1997
- 12.世界大百科事典,平凡社,1993
- 13.世界地名ルーツ辞典, 牧英夫編著, 創拓社,1990
- 14.ユネスコ世界遺産 北・中央ヨーロッパ,ユネスコ世界遺産センター監修,講談社,1997
- 15.MICHELIN DEUTSCHLAND 1998, MICHELIN, 1998
- 16.URBAN DEVELOPMENT IN CENTRAL EUROPE,E.A.GUTKIND,THE FREE PRESS, 1964
- 17.BLUE GUIDE WESTERN GERMANY, JAMES BENTLEY,A&C BLACK,1995
- 18.GERMANY, LONELY PLANET PUBLICATIONS, 1998
- 19.AACHEN AUS DER LUFT, MANFRED CZERWINSKI, WARTBERG VERLAG,1997
- 20.RUNDWEGE AACHEN, INGEBORG MONHEIM, BAYERISCHE VERLAGSANSTALT, 1992
- 21.HANSESTADT LÜBECK, SCHÖNING&CO+GEBRÜDER SCHMIDT
- 22.DIE REIHE ARCHIVBILDER LÜBECK,UWEBREMSE,SUTTON VERLAG,1997
- 23.MAINZ,KARL BAEDEKER,1998
- 24.SCHWERIN HISTORISCHE KARTEN UND PLÄNE,DIETER GREVE他, LANDESHAUPTSTADT SCHWERIN, 1997

### 3. 日向調査の成果

図11

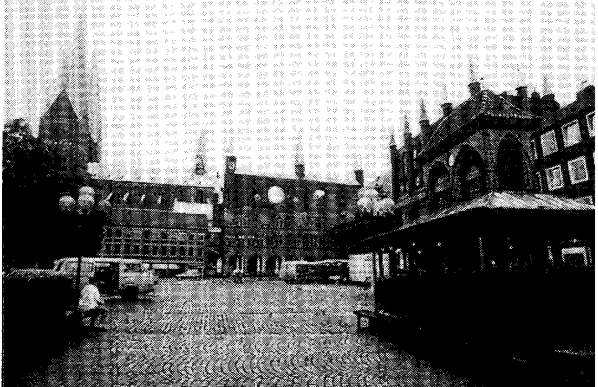
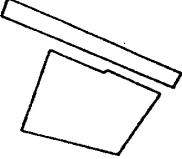
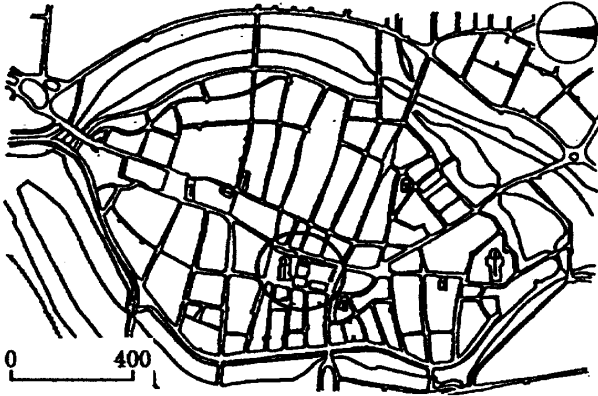
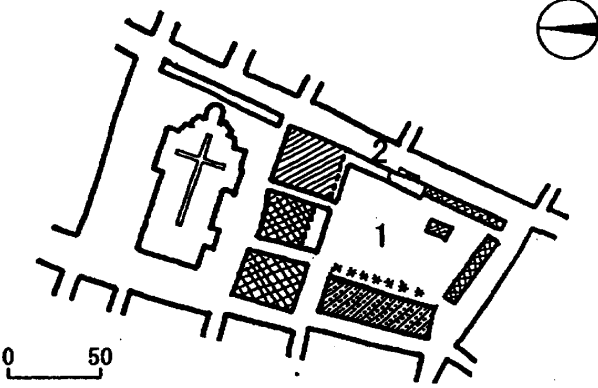
<p>GER-98-10</p> <p>国 : GERMANY</p> <p>都市: LÜBECK</p>	<p>広場名称</p>	<p>1)MARKT 2)BREITE STRAÙE</p>	
<p>広場写真</p>			<p>規模</p> <p>1) 5485.0㎡ 2) 1941.4㎡</p> 
<p>都市における 広場の位置</p>	 <p>0 400</p>		<p>広場機能</p> <p>市庁舎前広場 郵便局前広場 市場広場</p>
<p>広場形態</p>	 <p>0 50</p>		<p>周辺建築物</p> <p>市庁舎 郵便局 商業施設 市場施設 聖母マリア教会 地下公衆トイレ タクシー乗り場</p>
<p>都市および広場の概要</p>			<p>資料</p>
<p>トラヴェル川と運河によって囲まれた中州に旧市街がある。リュベックは中世後期にヨーロッパ北部の商業・交易を掌握していたハンザ同盟最大の都市で、「ハンザの女王」と呼ばれていた。広場に面してL字型の配置をとる市庁舎は1250年に建設が始まり、後に増築されている。黒褐色でつや出しレンガのファサードは重厚な印象を与える。市庁舎東側のブライト通りには1594年に建造されたオットー・ルネッサンス様式の階段がある。同時期市民教会である聖母マリア教会も建てられており、マーケット広場周辺とあわせて中世市民都市の中心を形成していた。現在の広場には花や果物を売る市が立つ。広場には数台の車両が乗り入れていたが、歩行者の通行を妨げるほどではない。</p> <p>担当者 金子 友美</p>			<p>資料03 資料11 資料04 資料14 資料05 資料15 資料06 資料16 資料07 資料18 資料08 資料21 資料09 資料22 資料10</p>

図12


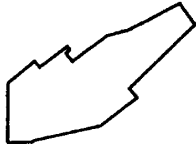

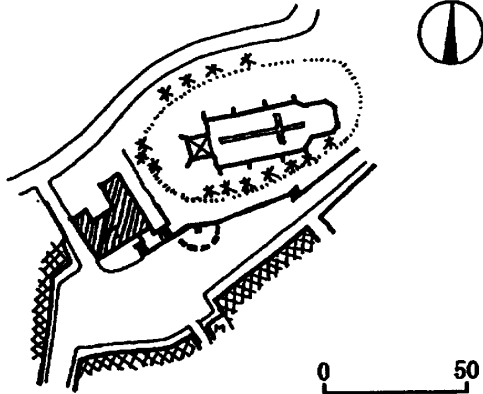
<p>GER-98-09</p> <p>国 : GERMANY</p> <p>都市: MÖLLN</p>		<p>広場名称</p> <p>1) AM MARKT</p>
<p>広場写真</p>		<p>規模</p> <p>2604.5㎡</p> 
<p>都市における広場の位置</p>		<p>広場機能</p> <p>市庁舎前広場 博物館前広場 憩いの広場</p>
<p>広場形態</p>		<p>周辺建築物</p> <p>市庁舎・郷土博物館 テイル・オイレンシュピゲル博物館 聖ニコライ教会 水場 テイル・オイレンシュピゲルの像 商業施設</p>
<p>都市および広場の概要</p> <p>この町は、いくつかの湖が点在するラエンブ'ル湖沼自然公園の中にある保養地である。また、有名な道化師テイル・オイレンシュピゲルの町でもあり、1350年にこの地で死んだと伝えられている。広場の片隅に水場を飾る彼の像もある。広場には市庁舎、郷土博物館、テイル・オイレンシュピゲル博物館が面している。郷土博物館は市庁舎と同じ建物内にある。広場から階段を昇った少し高い場所には、13~15世紀に建造された聖ニコライ教会もあり、この町の見どころが集まっている。広場に出たカフェテラスでくつろぐ人達の姿が見られた。</p> <p>担当者 横田 智美</p>		<p>資料</p> <p>資料03 資料09 資料11 資料16 資料17 資料24</p>

図13

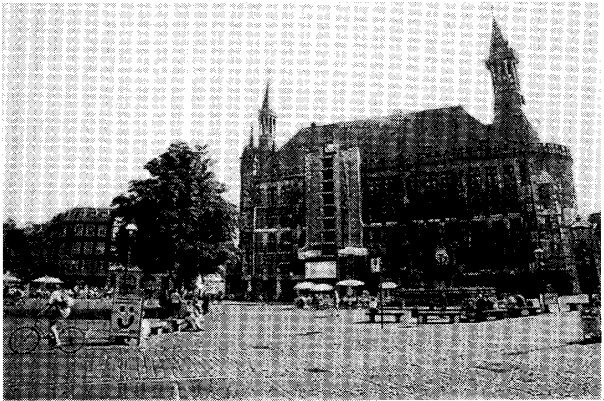
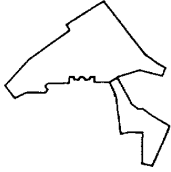
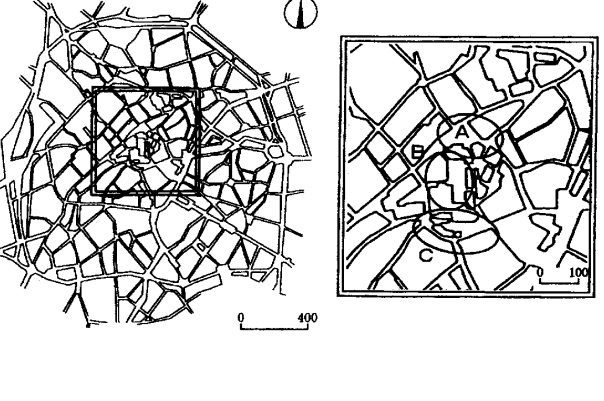
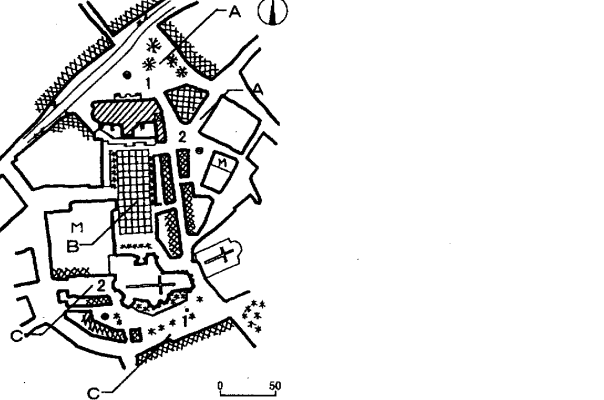

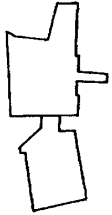
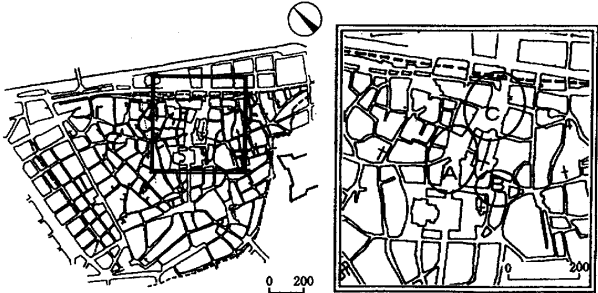
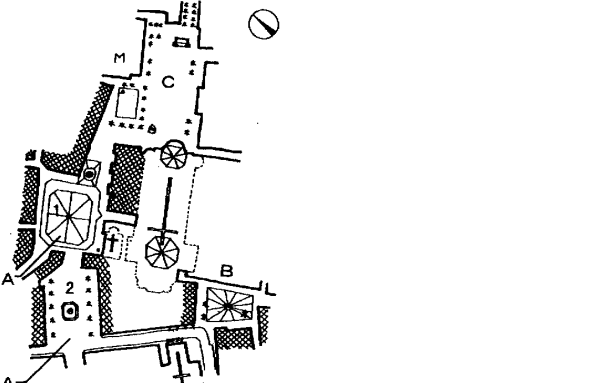
<p>GER-98-20</p> <p>国 : GERMANY</p> <p>都市: AACHEN</p>	<p>広場名称</p> <p>1) MARKT 2) HÜHNERMARKT</p>	
<p>広場写真</p>		<p>規模</p> <p>1) 5371.8㎡ 2) 1503.4㎡</p> 
<p>都市における広場の位置</p>		<p>広場機能</p> <p>市庁舎前広場 憩いの広場 商業広場 市場広場</p>
<p>広場形態</p>		<p>周辺建築物</p> <p>市庁舎 商業施設 マルトの泉水・カール大帝の像 泉 クヴァン博物館 ガラスの塔</p>
<p>都市および広場の概要</p> <p>アヘンは、アルプス高地の北端、そしてドイツの西端に位置する。この地には、かつてライン戦線のローマ軍のための大保養地があった。1330～50年頃にかけて、カール大帝の宮廷とフリードリッヒ1世が建てた付属建築物の基礎の上に、新しいゴシック様式の市庁舎が建設された。そのファサドはマルトに面しており、アヘンで戴冠した歴代の皇帝や国王の像で飾られている。広場にあるマルトの泉水には、カール大帝の像がある。市庁舎の南東側、KATSCHHOFの東側に位置するHUNHNERマルト(鳥広場)にあるガラスの塔は、かつての宮殿の名残である。アヘンの建築家クヴァンが薬屋アントン・レーヌ・モナムのために建てた家は、現在ではクヴァン博物館になっている。</p> <p>担当者 高橋 真紀</p>		<p>資料</p> <p>資料03 資料20 資料08 資料09 資料11 資料14 資料15 資料16 資料19</p>

図14

<p>GER-98-53</p> <p>国 : GERMANY</p> <p>都市 : MAINZ</p>	<p>広場名称</p> <p>1) MARKT 2) HÖFCHEN</p>	
<p>広場写真</p>		<p>規模</p> <p>1) 3928.5m<sup>2</sup> 2) 2561.3m<sup>2</sup></p> 
<p>都市における広場の位置</p>		<p>広場機能</p> <p>教会(大聖堂)前広場 市場広場</p>
<p>広場形態</p>		<p>周辺建築物</p> <p>大聖堂 ルネサンスの泉 商業施設 ST. BONIFATIUSの像 噴水(2) 円柱</p>
<p>都市および広場の概要</p> <p>古代ローマ時代から軍事上の拠点として栄えたが、8世紀半ばから重要な宗教都市と見なされ、13世紀には神聖ローマ帝国の事実上の首都ともみなされ、「黄金の Mainz」と称される繁栄を誇った。現在この町はラインラント・プファルツ州の州都であり、フランクフルトと並ぶ「ライン・メイン工業地帯」の一方の中心地である。マルクトには装飾の施されたルネサンスの泉があり、旧市街全体は戦後修復されたものである。また、マルクトの西側に位置するヘーフェン(小庭)は以前は囲われていた小広場である。現在は中央に噴水をもつ。広場に面してカフェが並び賑わいを見せている。</p> <p>担当者 鶴田 佳子</p>		<p>資料</p> <p>資料03 資料16 資料07 資料17 資料09 資料18 資料10 資料23 資料11 資料12 資料13 資料15</p>